

平成27年度全国学力・学習状況調査の結果について

平成27年11月30日

白馬村教育委員会

本年4月21日に実施した「全国学力・学習状況調査」について、今後の教育活動に役立てるため本村の結果を分析しましたので、その概要をお知らせします。

1 調査の概要

(1) 調査対象

- ①小学校第6学年（調査実施人数 71人）
- ②中学校第3学年（調査実施人数 75人）

(2) 調査内容

①教科に関する調査

- ・主として「知識」に関する問題（国語A、算数・数学A、理科）
- ・主として「活用」に関する問題（国語B、算数・数学B、理科）

②質問紙調査

- ・児童に関する調査
- ・学校に関する調査

2 調査結果の概要

(1) 教科に関する調査結果の概要

①小学校

- ア 国語Aは全国平均正答率をやや下回る結果でした。
国語Bは全国平均正答率と同程度の結果でした。
- イ 算数A・Bとも全国平均正答率をやや下回る結果でした。
- ウ 理科は全国平均正答率と同程度の結果でした。

②中学校

- ア 国語A・Bとも全国平均正答率と同程度でした。
- イ 算数A・Bとも全国平均正答率と同程度でした。
- ウ 理科は全国平均正答率と同程度の結果でした。

(2) 各教科の調査結果と今後の対応の概要

①小学校

- ア 主として知識を見る「国語A」の調査結果では、評価の観点である「話す・聞く力」「書く力」がやや高く、「読む力」「言語についての知識・理解・技能」がやや低いとい

う傾向が見られました。主として活用力を見る「国語B」では、「書く力」「読む力」ともに全国とほぼ同じ結果となっています。今後、文の構成を理解したり文章の表現の工夫を捉えたりする指導の充実を図り、基礎的な知識・技能の習得や読む力をさらに高めていくことが望まれます。

イ 算数の調査結果では、主として知識を見る「算数A」では、「量と測定」「数量関係」の領域がやや高く、「数と計算」「図形」の領域が低いとの傾向が見られました。主として活用力を見る「算数B」も同様の結果でした。今後、計算の仕方や図形の性質等を形式的に覚えるのではなく、既習の計算を基に計算の仕方を考えたり、図形の構成する要素に着目して図形の性質を捉えたりする活動を充実し、より確実な定着を図っていくことが望まれます。

ウ 理科の調査結果では、「科学的な思考・表現力」「自然事象についての知識・理解」に比べ、「観察・実験の技能」がやや低い傾向が見られました。また、領域別では、「エネルギー」の分野が高く、「物質」「地球」の分野の定着が低いという結果でした。今後、事象の変化とその要因とを関係づけて考える活動の充実や、器具の操作の意味を捉えて適切な扱い方を理解する指導の充実が望まれます。

②中学校

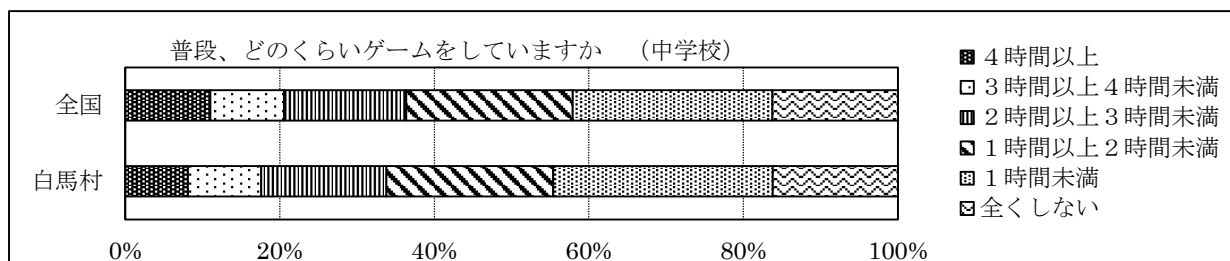
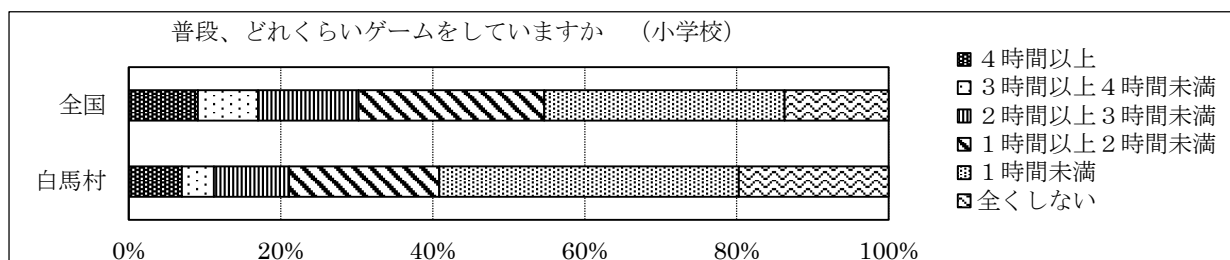
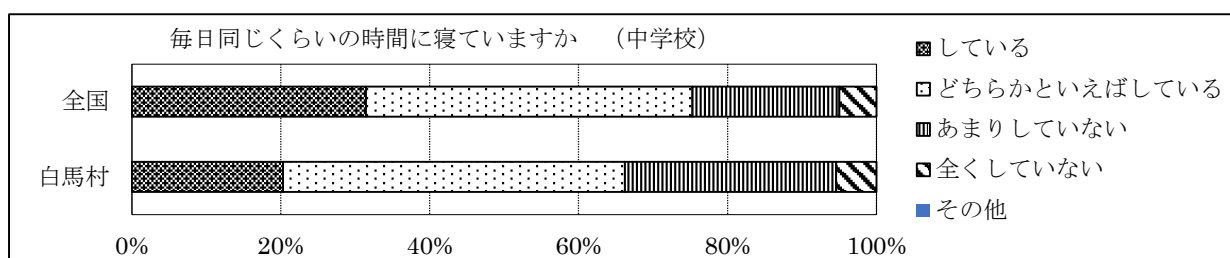
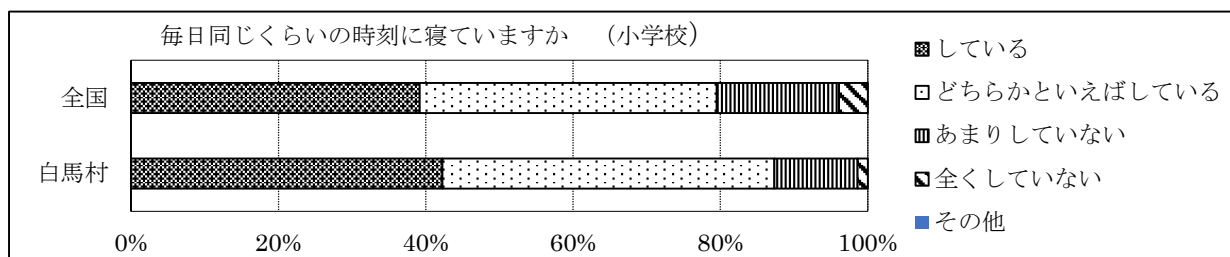
ア 主として知識を見る「国語A」の調査結果では、評価の観点である「話す・聞く力」「書く力」「読む力」「言語についての知識・理解・技能」の4観点とも概ね定着しているとの結果が出ました。また、活用力を見る「国語B」の調査結果でも同様の結果でしたが、「話す・聞く力」「書く力」がやや低いとの傾向が見られました。全体に学力の定着が伺えますが、今後、自らの考えを書いたり発言したりする活動等、豊かな言語活動を通し、活用面での「聞く・話す・書く力」をさらに高めていくことが望まれます。

イ 主として知識を見る「数学A」の調査結果では、「数と式」「図形」「関数」資料活用」の各領域とも基礎的内容について概ね理解できているとの結果が見られました。また、主として活用力を見る「数学B」の調査結果でも同様の結果でした。全体に学力の定着が伺えますが、「数学B」において他の領域に比べやや低い傾向が見られた「資料の活用」においては、与えられた情報から必要な情報を選択し、適切に処理する学習活動等の充実が望まれます。

ウ 理科の調査結果では、主として活用に関する問題の正答率が高く、主として知識に関する問題の正答率が低いという結果でした。また、評価の観点別では「科学的な思考・表現」「観察・実験の技能」に比べ、「自然事象についての知識・理解」が低いとの傾向が見られました。今後、分野ごとの基本的な知識・技能の定着を図ると共に、語り合う場面を授業に位置づけるなどして科学的な思考や表現力を高めていくことが望まれます。

(3) 児童生徒質問調査の結果（傾向と課題）

①生活習慣等



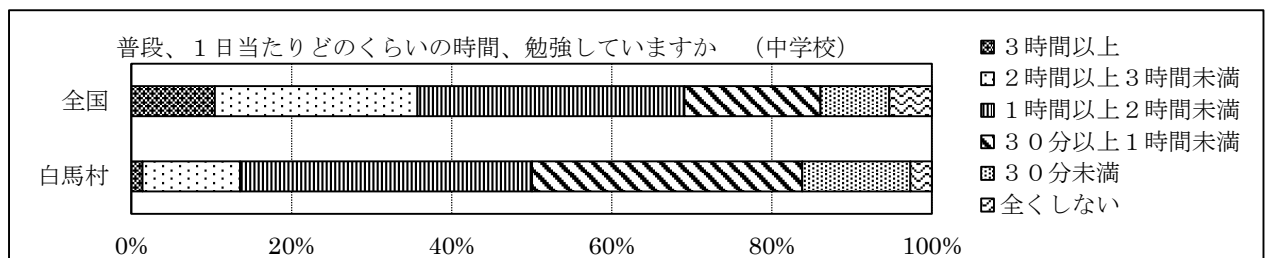
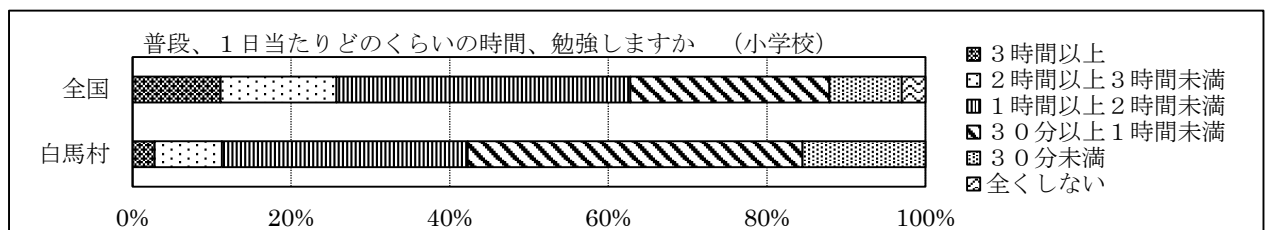
【小学校】

- ・朝食を毎日食べたり、同じくらいの時間に就寝や起床をしている児童の割合は全国を上回っており、基本的な生活習慣が定着していると思われます。
- ・3時間以上のテレビ視聴や2時間以上のゲームをしている児童の割合は全国を大きく下回っており、メール等の利用時間も全国に比べ短い結果となっています。ただ、昨年と比べるといずれも増加傾向にあるため、長時間使用とならないよう早めに対策を講じていく必要があります。

【中学校】

- ・朝食を毎日とっている生徒の割合は全国とほぼ同じですが、就寝時刻が一定でない生徒は全国を上回り、3割を超えています。生活習慣はやや不規則と言えます。
- ・2時間以上ゲームをしている生徒の割合は全国をやや下回っており、1時間以上メール等をしている生徒の割合は全国を大きく下回っています。全国と比べると短時間ですが、ゲーム時間やメール等の使用時間は昨年度より増加傾向にあります。また、今年度村内児童生徒に行った情報機器に関する調査でも、中学生のスマートフォン所持率は昨年度に比べ10%ほど増加していますので、スマートフォン等の利用にあたっては早急に対策を講じていく必要があります。

②家庭での学習時間



【小学校】

- ・平日や休日に2時間以上学習している児童の割合は全国を大きく下回っており、本村児童の場合、平日・休日とも学習時間が1時間未満の者が半数を占めています。家で学習する習慣は身につけているものの、全国に比べると学習時間は短いといえます。全国の調査結果では家庭学習の時間が長いほど正答率が高いとの結果が出ていますので、学力の定着を図るためにも、家庭学習のあり方を考えていく必要があります。

【中学校】

- ・平日と休日ともに、2時間以上学習している生徒の割合は全国を大きく下回り、反対に、学習時間が1時間より少ない生徒の割合は全国を大きく上回るなど、全国に比べ学習時間は短いといえます。
- ・「家で授業の予習をしている、どちらかといえばしている」と答えている生徒の割合は全国を大きく下回っています。復習についても同様の結果であり、家での学習は、宿題が中心であると思われます。

③学校生活等

ア小学校

- ・「学校生活は楽しい」と感じている児童の割合は全国を大きく上回っており、充実した学校生活を送っていることが伺えます。
- ・自分に良いところがあるかとの質問に、「ある・どちらかといえばある」と答えている児童は9割近くおり、全国を上回っています。自尊感情は比較的高いと言えます。

イ中学校

- ・「学校に行くのが楽しい、どちらかといえば楽しい」と感じている生徒の割合は全国同様に8割を超えており、充実した学校生活を送っていることが伺えます。
- ・「自分には良いところがある」と感じている生徒の割合は全国を下回り、反対に、「どちらかといえば良いところは無い」と感じている生徒の割合は全国を上回っています。自尊感情がやや低い傾向が見られますが、「どちらかといえば良いところは無い」と感じている生徒の割合は昨年度と比べると減少しており、意識の向上が伺えます。

3 今後の取り組み

(1) 教育委員会として

- ①本村で設置している学力向上対策委員会において、全国学力調査の結果分析により学習状況の実態を掴み、児童生徒の実態に応じた学力向上のための方策について研究を進めます。
- ②学校の教育課題に対応するための支援に努めます。
- ③知識・理解の定着や思考力・表現力の向上を図る手だてとして、教育の情報化を進めます。
- ④メディア依存から子どもを守るため、学校・家庭・地域が一体となった取り組みを進めます。

(2) 学校として

- ①学校では全国学力調査結果を分析し、自校の課題を明確にしなが、学力向上に努めます。そのために、以下の点にも配慮します。
 - ・1時間の授業において、学習のねらいを明確化し、終末時に定着をきちんと見とどける日々の授業の充実
 - ・思考力や表現力を高めるため、授業展開における話し合う場・考え合う場の位置付け
 - ・家庭学習の充実
- ②家庭での基本的な生活習慣の形成や家庭学習の充実を図るため、家庭との連携を密にした取り組みを進めます。